

令和4年度第3回宮崎県スポーツ推進審議会 議事録

I 日程等

- 1 日 時：令和5年2月8日（水）
- 2 会 場：県庁本館講堂
- 3 出席委員：春山委員、高木委員、吉富委員、木下委員、内村委員、川野委員、
富高委員、古川委員、和田委員、山口委員、竹元委員、恵利委員、
松田委員、鶴田委員、宮田委員、遠坂委員、西田委員（17名）

II 概要

1 副教育長あいさつ

令和4年度第3回宮崎県スポーツ推進審議会の開催にあたり、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、大変御多用な中、御出席いただき、誠にありがとうございます。
また、日頃から、本県スポーツの推進につきまして、それぞれの分野で、多大な御理解と御協力をいただき、改めてお礼申し上げます。

さて、御承知のとおり、国の第3期スポーツ基本計画では、今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む施策とし、従来のスポーツによる健康増進等に加え、スポーツを通じた共生社会の実現や地方創生、まちづくり等の推進が示されております。

本県におきましては、2027年の開催が内定しております第81回国民スポーツ大会・第26回全国障害者スポーツ大会に向け、関係団体と連携しながら、競技力向上はもとより、県民のライフステージに応じた多様なスポーツ活動や地域振興を図るなど、スポーツを生かした「未来のみやぎき」づくりを推進しているところであります。

県教育委員会では本年度、これらの取組がより一層充実し、さらに推進が図られるよう「次期宮崎県スポーツ推進計画」の策定に取り組んでまいりました。

委員の皆様には、計画策定の参考となる貴重な御意見等を賜りましたことに感謝申し上げます。

本日は、次期宮崎県スポーツ推進計画の素案につきまして、再度、皆様から御意見や情報をいただく機会としております。

委員の皆様には、それぞれのお立場からのお考えをお聞かせいただき、本県スポーツのより一層の推進にお力添えいただきますよう、お願い申し上げ、開会の御挨拶といたします。

本日は、よろしく願いいたします。

2 議事

(1) 説明

ア 次期宮崎県スポーツ推進計画策定経過及び今後の予定について

イ 次期宮崎県スポーツ推進計画基本目標について

『スポーツを生かした「未来みやぎき」づくりの推進（案）』

ア、イについて、事務局より説明

発言者	発言内容
議長	○ 事務局の説明について、質問等がないか。(特になし)

(2) 説明・協議

ア 次期宮崎県スポーツ推進計画 施策10

『幅広い世代でのスポーツの推進（案）』について

発言者	発言内容
議長	○ 協議の前に、次期宮崎県スポーツ推進計画の施策10『幅広い世代でのスポーツの推進（案）』について、事務局から策定の意図等について説明をお願いします。
事務局	○ 配付資料を基に説明 ・現状と課題及び今後の方向性について ・施策の内容と主な取組について
議長	○ 事務局からの説明について、質問等はないか。(特になし) ○ これより協議を始める。意見のある方は挙手にてお願いしたい。
委員	○ 現在、中学校における部活動の地域移行が進められようとする状況にある。本素案においては施策11に部活動の記載がなされており、部活動が学校における重要な教育活動として位置づけられていることは意義深い。 一方、部活動の地域移行が進んでいくであろう今後のことを考えると、施策10において子ども達の地域におけるスポーツ活動の環境整備に関する事項が設けられてもよいのではないかと考える。
委員	○ 幅広い世代でのスポーツ推進の「世代」から、年代をイメージする方が多いのではないかと思う。幅広いという言葉が「特性や分野」等にもつながるような表現もあるとよいと思う。 ○ 同じくスポーツ通じた共生社会の実現の取組において、障がい者スポーツの取組がメインとして記載されていると感じる。実際の取組においては、世代や分野を超えて繋がっていくという真に共生社会が目指す社会づくりにつながる事業等がなされるとよいと思う。

委員	<p>○ 4年後の全国障害者スポーツ大会に向けた取組が、大会後の県内各地域におけるスポーツを通じた共生社会の実現につながっていくことが望ましい。大会後も日常的な地域の姿として、障がいのある・なし、年齢、性別、分野を超えたスポーツ活動がなされ、県民誰もがスポーツに「ふれあい・応援する・支える」といった雰囲気自然な形で醸成されていくことを目指したい。</p>
委員	<p>○ 障がい者スポーツについて馴染みが浅いため、どのような競技や種目があることを知らない。私のような人のためにも障がい者スポーツに触れる、体験する機会が増えると思う。</p> <p>○ 本県開催の国スポ・障スポ大会に向けた競技力向上については、県外チームとの合同合宿による交流、情報収集や、選手育成のあり方等について競技種別等を超えたオール宮崎で取り組んでいかれることを望む。</p>
委員	<p>○ 高校生の競技力向上を指導者という立場で担っているが、選手育成にあたっては、スタッフ体制の充実が重要であると痛感している。自身の経験からも指導の全てを一人で担おうとする指導者は少なくないのではないかと感じている。自分のチームでは今年度、県が実施する事業等を活用して、例えばコンディショニングコーチに調整を依頼する等、それぞれの分野の専門家に指導を任せることで自分が本来担うべき指導に専念でき、選手の成長もこれまで以上のものが見られた。</p>
委員	<p>○ 国スポ大会に向け、本年度より県が実施するターゲットエイジを強化する事業と中体連各競技専門部が連携する取組に携わらせていただいた。初年度ということもあり課題も多く見つかったが、こうした施策に基づく個々の事業をよりよく推進していくことが大切であると感じている。</p>
委員	<p>○ 国スポ大会に向けた競技力向上という点では、小中学生のターゲットとなる世代を育てていくことは不可欠であるが、長期的視野に立って考えると、様々なスポーツを体験することを通して自分の適正にあった競技や種目を見出していく県のワールドアスリート発掘事業も必要不可欠な取組の一つであると考えている。</p>
委員	<p>○ 企業の状況等、本県の実情を鑑みると本県における競技力向上のターゲットは少年種別であると考えている。高体連では、県の様々な事業による支援を活用しながら、県外選手との練習会や優秀な指導者を招聘等も実施できている。引き</p>

委員	<p>続き中体連との連携を図りながら少年種別の競技力向上に努めていきたい。</p> <p>○ 先ほどのチームとしての指導体制による指導についての話題には、まったくの同感である。国体を視察した際にもドクターや整体等、各分野の専門家がチームや選手の要望に応じて派遣され選手の活躍を陰ながら支えていた。例えば今後、情報をとってきて分析したものをチームや選手に提供するといった専門家もスタッフに加えていくことが考えられると思う。</p>
委員	<p>○ メディカルスタッフとしてスポーツを支えている。育成年代を支える立場として関わり見てきた実態としては、同程度の技術力をもったチームでは、ケガをする選手が少ないチームが圧倒的に結果を残している。少年種別では選手を一番近くで見ている指導者がアンテナを高くもち、様子がおかしい場合は、早めにメディカルにつないでほしい。また、選手と指導者がオープンに話せる関係性が築かれることを願っている。</p> <p>○ キャンプ受け入れとしての関わりにおいては、県内に選手をバックアップする病院が限られている現状から、ケガをした選手が長時間かけて治療のための移動を余儀なくされるといった現状を目にしている。キャンプ誘致の際には、こうしたことも考慮いただけるとありがたい。</p> <p>○ 国体派遣についても要望として1点お願いしたい。現在、メディカルスタッフと選手の宿舎が別になっている。ぜひ、同宿舎にしていただき、メディカルスタッフが近くで選手を観ることができるようになっていただけると有り難い。</p>
委員	<p>○ プロ野球チームの球団職員として勤めていた経験があるが、地元では選手掛かりつけの病院等があったりするが、キャンプや遠征の際は、病院を探すことに相当な労力がかかっていた。県としてバックアップ体制を整備することは、訪れるチームへの安心感につながるとともに、誘致にも有利に働くと考える。選手とメディカルスタッフ等が同宿舎で選手を近くで観察するという話題は同感である。</p>
委員	<p>○ 健康づくりという観点では、一人で行っても、誰と行っても気軽にスポーツができる環境が整備されていくことが大切である。県内においても都市部と山間部ではスポーツする場や機会に差があるのが実態であると思う。県内全域において、いつ行っても、誰と行ってもスポーツができる環境が整っていくことが望ましいと考える。</p>

委員	<p>○ スポーツによる地域活性化では、障がい者スポーツの招致に力を入れていくとよいと考える。同時に施設整備やバリアフリー化等の改修を進めることで、県内の障がい者スポーツが活性化するとともに、誰もが気軽にスポーツできる環境整備にもつながるものと考えている。</p>
委員	<p>○ 本県開催の障スポ大会では、個人7競技、団体7競技の計14競技を開催する予定である。各競技の会場地となっている市町村においては、地域住民にとって馴染みの薄い競技や知らない競技もあると思う。開催までの4年間で各市町村と競技団体が連携して、どのような仕掛けをうち、その競技を根付かせていくかがポイントとなる。また、大会後には各市町村に根付いたものが県全域に広がっていくことを期待する。そのことが障スポ大会を本県で開催することの意義であり、ひいては本県におけるスポーツを通じた地域活性化にもつながるものと考えている。</p>
委員	<p>○ 本町は国スポ大会のスポーツクライミング会場地となっている。この夏、県主催の大会が開催されたが、県内から多くの参加者が町を訪れ、競技人口の多さに正直驚かされたのと同時に、あまり知られていない競技を多くの人に知ってもらえるよい機会になるとも感じた。本町では大会開催を通じて、まちづくりにも取り組む計画である。例えば、町内中学校にスポーツクライミングを設置するといったことで地元選手の育成、大会後も地元で根付く競技として育てていくことを念頭においている。各市町村におけるそうした取組がスポーツランドみやぎづくりにつながるものと考えている。</p> <p>○ 施設整備については、大会後の維持管理や活用等、悩ましい課題もあるが、知恵を出し合い解決していくことが大切である。</p>
委員	<p>○ 観光協会では、するスポーツの側面的支援を行っている。アマチュアスポーツ合宿には、令和2年度より県内のチームにも10泊以上の宿泊を条件に支援を行うよう制度化した。今年度の支援団体は785チームの見込みであり、昨年度の実績の約2倍となっている。スポーツツーリズム関係では、ゴルフの県外ビジター利用者が増加傾向にある。県内の利用者も含めた全体の利用者数もコロナ禍前と遜色ない状況となっている。サイクリングには、各市町村が実施するイベントに50万円を上限とする助成を行っている。今年度は5つの団体に助成を行う見込みである。</p>

委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国スポ・障スポ大会に向けてSNSの活用等による機運づくりの醸成を積極的に行っていくとよいと思う。また、トップアスリートではない一般市民のスポーツに興味・関心を高めるための一つの方策として、施設の開放を積極的に行ってほしい。 ○ 住民のスポーツ活動を支える地域のスポーツクラブへの支援も拡充されるとよい。現在、コロナの影響もあり経営が苦しいクラブも少なくないと聞く。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動・スポーツに特化したイベントとなると一定の分野の方々のみの参画で多くの人への広がりが期待しにくい面もある。運動・スポーツに対する興味・関心が低い方々を引き込むためには、様々な分野とコラボしたイベント等を実施して巻き込んでいく仕掛けも必要と思う。また、例えばスポーツ関係で宮崎に訪れた県外の方に宮崎のスポーツ以外の魅力を知ってもらうことにもつながるのではないかな。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校でパラトライアスロンを体験するプログラムを実施していただいた。障がい者スポーツ、パラスポーツとの出会いや、子ども達に知ってもらう機会を学校現場でも意識して設けいく必要があると感じている。 ○ 学校には生活困窮により、少年団活動等をしたくてもできない児童もいる。そうした子ども達へのスポーツ基金の整備もしていただくと有り難い。 ○ 自分が携わっている競技スポーツには、ママさんアスリートも在籍している。ママさんアスリートは子どもを連れて試合に来るケースも少なくない。会場に託児コーナーを設け、保育士を目指す学生がボランティアで支援をする等の仕組みがあるとよいのではないかな。こうした取組は、幅広い世代でのスポーツの推進にも寄与するものと考えている。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 福祉レクリエーションと銘打ち、体を動かす機会の提供を行っているが、会場借用等において障壁となる事案も少なくない。スポーツとネーミングされるとその問題が解決することもある。ぜひ、包括的に運動・スポーツ活動を捉え、その環境整備が進められていくことを望む。 ○ みるスポーツにおいては、本県はプロスポーツチームのキャンプ等、環境に恵まれている。多くの県民がオープンにみるスポーツを楽しむことができる体制が整っていくことを望んでいる。
議長	<ul style="list-style-type: none"> ○ 委員の皆様から、それぞれの知見に基づく貴重な意見や情報をいただくことができた。

イ 次期宮崎県スポーツ推進計画 施策11

『児童生徒の健やかな体を育む体力・健康づくりの推進（案）』について

発言者	発言内容
議長	○ 後半は、次期宮崎県スポーツ推進計画の施策11『児童生徒の健やかな体を育む体力・健康づくり（案）』について協議を進める。はじめに事務局から策定の意図等について説明をお願いする。
事務局	○ 配付資料を基に説明 ・現状と課題及び今後の方向性について ・施策の内容と主な取組について
議長	○ 事務局からの説明について、質問等があればお願いしたい。(特になし) ○ それでは、前半に引き続き、委員の皆様それぞれのお立場から多様な意見をいただきたい。
委員	○ 本年度は県内の小学校に3名の小学校体育専科教員を配置していただいた。在籍校や近隣の学校の先生方の体育の授業の指導力向上に寄与している。一方で多くの小学校の実態として、学年体育の形式で体育の授業が実施されるケースが見られる。体育指導が得意な先生方は実践の積み重ねにより指導力を伸ばしていくが、そうでない先生方の指導力向上が課題となる。対策として例えば、初期研修において学校体育研究発表大会を悉皆研修とする等の措置が必要ではないかと考える。指導力向上なくして、子ども達の体力向上や楽しく運動・スポーツに触れる授業の実践は図られていかないと懸念している。
委員	○ 食育の取組も記載があるが、これは喫緊の課題と捉えている。朝食抜きの子どもの数が少なくない等、子ども達を取り巻く食環境に関して心配なことを見聞きする機会が増えたように感じている。体づくり、健康づくりの基本は食にあると言っても過言でないと思う。ぜひ、充実した食育の取組が展開されていくことを期待している。
委員	○ 肥満の子どもの増加、姿勢がよくない子どもの増加が気になっている。日々の積み重ねが必要な取組になると思うが課題解消に向けて推進を図ってほしい。
委員	○ 運動・スポーツをする子どもと、そうでない子どもの二極化はコロナ禍においてさらに顕著となっていると感じる。 ○ 部活動において選択肢が少なくなっているのは事実である。子ども達が様々なスポーツを体験・経験できる機会を設けていくための方策を考えていかなければならない。

委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 二極化の問題が顕著化していることは強く感じている。ポストコロナ、国スポ・障スポ開催に向けてスポーツを充実させる機運が盛り上がっていく中、子ども達の日常のスポーツ活動も充実させていかなければならない。例えば、子どもバージョンの1130体操をつくって、県下小学校で実施していく等、日常的に継続して取り組める、子どもが自然に体を動かす習慣を身につけるようなメニューがあってもよいと考える。 ○ 県は命の教育を大切にしている。性教育や食育の推進は、命の根幹をなすことを学ぶ分野であると考え。プログラム化されたものが授業等で計画的に実施されていくことが望ましい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本大学では、中学校の保健体育の免許をもった小学校教諭の養成に力を入れている。特に小さな子どもの運動・スポーツ体験は、生涯スポーツへとつながる大切なものである。この段階で専門的な知識をもった指導者から楽しく運動・スポーツに触れる体験をさせてもらうことは、その後の運動・スポーツ習慣化において大きな影響となる。 ○ 運動能力は、身体活動も含めた様々な体験から体を上手に動かすことができるようになる。体力は、継続的に歩いたり、走ったりすることで身体機能が高まる。学校体育では運動能力を高めることに主眼が置かれた指導がなされていると思うが、同時に体力を高めるような指導を行っていくには、やはり専門的な知識を備えた指導者が指導することが望ましいと考える。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日常の食生活について、保護者、指導者の理解を得ることが最も大切である。食育を推進していく上で、栄養士や栄養教諭を積極的に活用してほしい。 ○ 生活習慣は幼児の頃からの取組が将来に影響を及ぼす。周りの大人のサポート体制を整え、日常的、継続的な取組がなされていくことが望ましい。チラシ等を活用して情報を定期的に発信するとよいと思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動・スポーツが苦手な子ども達は、習慣が身についていない。習慣が身についていないのは、小さい頃に楽しさを味わう経験が不足しているからと考える。特に小学校の授業では、遊びの要素を取り入れた運動を多く取り入れて、楽しさに触れさせるとともに、神経系の発達を促すとよい。 ○ 運動・スポーツが得意な子どもたちは、過多による心身の障がい懸念される。十分な休養も運動・スポーツを行う上

委員	<p>で大切な要素であることを指導してほしい。また、子ども達から指導者に休むことを訴えられる環境をつくってほしい。学校では運動器検診をとおして、子ども達のスポーツ障がいの未然防止、早期発見、早期治療に協力してもらえるとありがたい。</p>
委員	<p>○ 体育・保健体育の授業においても共生の視点を取り入れた授業づくりがなされている。学校研究発表大会ではサッカーの授業において、男女がともに楽しめるよう新聞紙で作ったボールでゲームを行う授業の提案がなされた。今後も教材や教具の工夫によって、体育・保健体育の授業における共生社会の実現の具現化を図っていきたい。</p>
委員	<p>○ ヤングケアラー、引きこもり、不登校等、学校に行きたくても行けない子どもたちも増えている。こうした子ども達は、運動・スポーツに触れる機会も当然少なくなるものと思われる。こうした子ども達を地域で誰かがキャッチして支援していくことが大切である。そのためにも福祉と教育が連携した取組も重要になってくると考える。</p>
委員	<p>○ 指導者養成ということでは、将来の日本を背負って立つ未来ある子ども達を指導する教職員の初期研修や経年経過研修において、子ども達が運動・スポーツをすることの大切さや、共生の視点をもった体育・保健体育の授業づくり等についての研修があってもよいと思う。</p>
委員	<p>○ 小学校体育の先生が子どもの学級担任であるが、体育の授業だけでなく昼休みの外遊び等、体を動かす楽しさを日常的に指導いただいております。充実した学校生活の様子を子どもが目を輝かせて話してくれる。中学生の子どもは、体育の授業で充実した活動ができた際に自分も教職に就きたいという思いを抱いたことを話してくれた。学校における体育・保健体育の授業や体育活動の重要性を我が子との会話から改めて感じさせられている。</p>
委員	<p>○ 共生社会につながる授業の参考例として、学校近隣の公園で地域の高齢者が指導者になって高校生とグラウンドゴルフを行ったということがある。共生社会につながるとともに生涯スポーツにも寄与する授業実践の例と考える。</p> <p>○ 中学校の部活動が話題によくあがるが、高校生を取り巻く環境も大きく変化してきている。高校総体では複数校合同チームによる大会出場が認められることとなった。高体連でも裾野を広げスポーツ参画人口を増やしていくために尽力していきたいと考えている。</p>

委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 近年の子ども達の体力低下について、公園、学校等の遊具減少も一因と思っている。バランス感覚や姿勢づくり、運動機能向上を子ども達が遊びのなかで自然に身につけたり、高めたりできる環境づくりも求められる。 ○ 今後の学校体育に関しては、先生だけに任せるのではなく、様々な団体や指導者が連携する体制が進むとよい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 数年前にスポーツレクリエーション指導者資格が新設された。中高年の運動・スポーツ未実施者の指導を目的に新設された資格である。広くない室内でもできるメニューが多く、楽しく体を動かし爽快感を味わうことができる。こういったものもぜひ活用されるとよい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども達の健康づくり、体力向上、運動・スポーツ習慣化の取組は、これまで以上に学校・家庭・地域が一体となって取り組んでいくことが必要と思われる。そのための指導者養成にも力を入れていくことが求められると考える。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校の部活動における選択肢の減少は今後さらに加速すると予想される。そのような中、各市町村において拠点校方式による部活動設置の取組において部活動精選がなされている。このような市町村の取組を後押しできるよう県中体連では、拠点校方式による部活動チームの大会参加を認める決議を行った。
議長	<ul style="list-style-type: none"> ○ 時間となったので、以上で協議を終了する。

3 閉会